

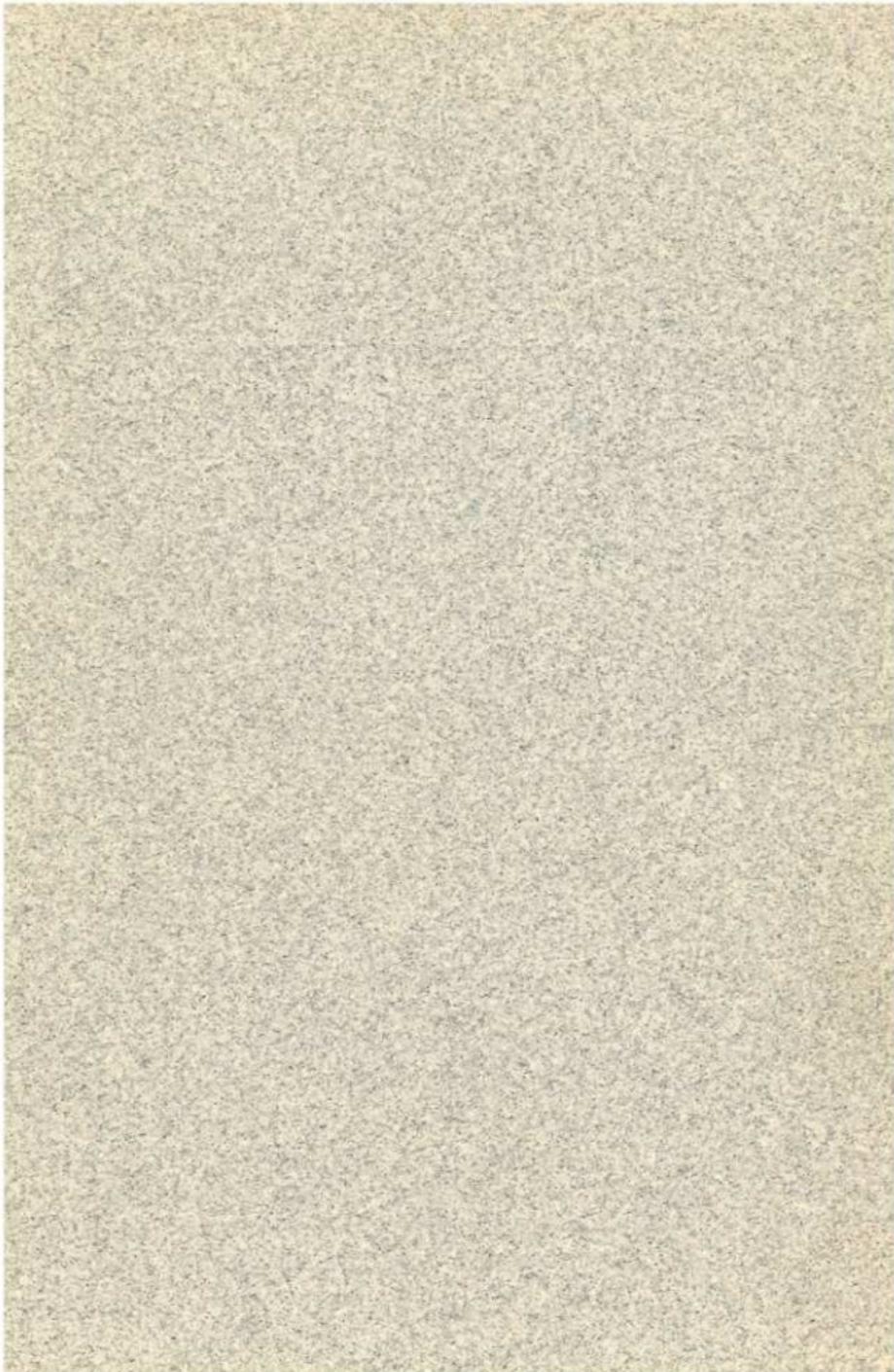
水產之池古墳群

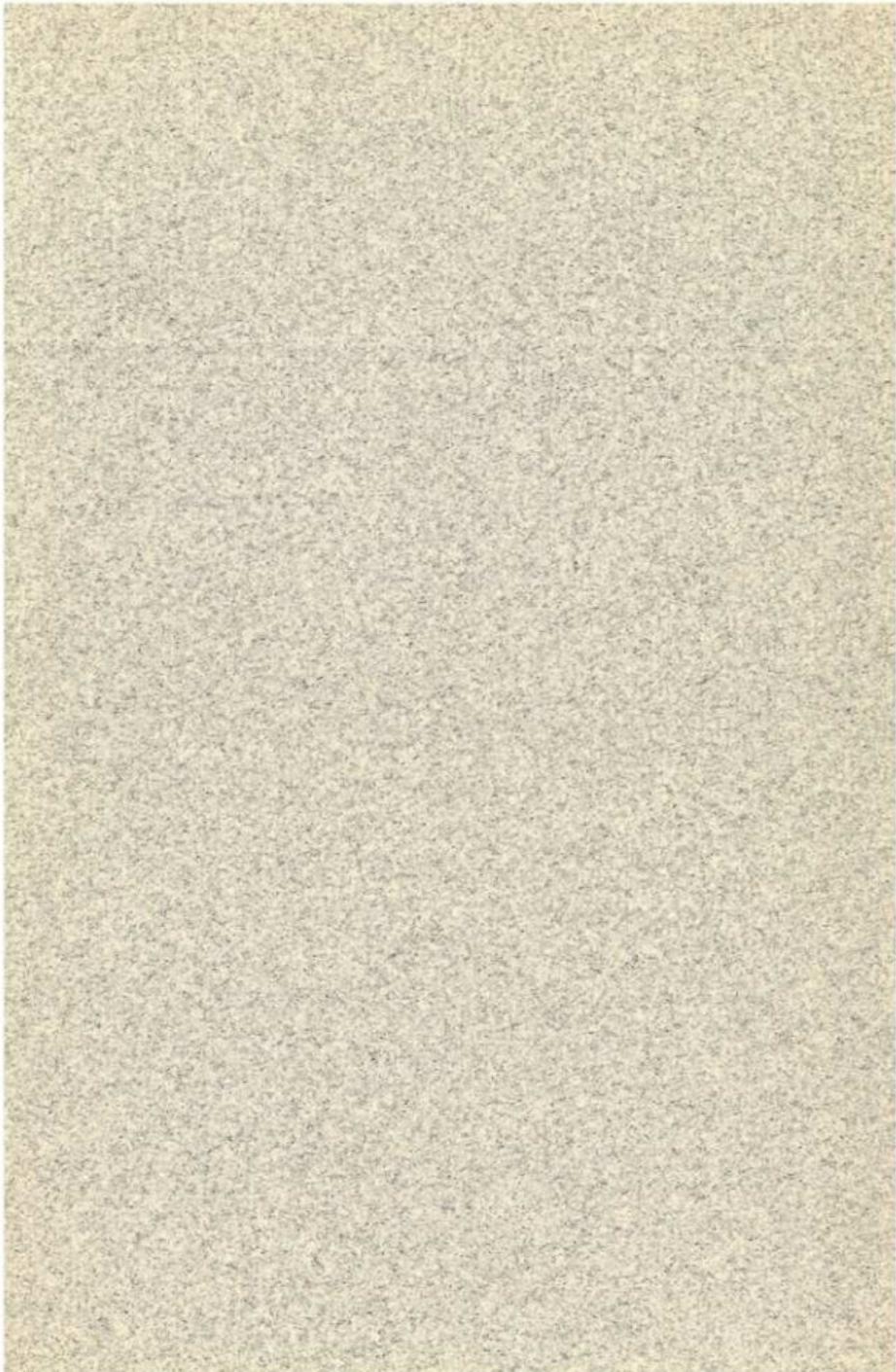
1974

掛川市教育委員会

文化係







水連ニノ池古墳群

掛川市立城北小学校建築に伴なう
埋 藏 文 化 財 発 墓 調 査 報 告

掛 川 市 教 育 委 員 会

序

掛川市においても、経済・社会の変貌により、人口の過疎過密の地区が生じております。

これにともなって、小学校学区の再編成が必要となり、その対策を協議してまいりました結果、昭和48年度に城北小学校を建築して、その解決をはかることになりました。

城北小学校の用地は、掛川城の北方約1kmのところに位置する丘陵地帯にあり、埋蔵文化財について事前踏査の結果、古墳が3基あることが判明いたしました。

用地決定にあたっては、文化財保護の立場から埋蔵文化財を極力さける方向で選択したのであります。当該地は学校用地として適していることなどにより、ここに決定したのであります。用地内にある3基の古墳のうち、1基は現状変更することなく保存することとし、残り2基については止むをえず発掘調査を実施して、記録保存の措置を講ずることになりました。

調査は日本考古学協会員久永春男氏に依頼して周到な調査をすすめたところ、調査の対象となった古墳2基のはか、あらたに、古墳1基と祭祀遺跡と推定されるもの1基が発見され多くの成果を得ました。

調査の終了にあたり、この調査に多大の労をわざらわした調査員ならびに関係者各位に対し深く感謝申しあげるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解と学術研究の資料として活用されれば、誠に幸甚であります。

昭和49年8月

掛川市教育委員会
教育長 山内監一

例　　言

1. 本書は、昭和48年3月23日から4月9日までの間に掛川市教育委員会が発掘調査した掛川市立城北小学校用地内遺跡の調査報告である。
2. この調査は、日本考古学協会久永春男氏を調査主任とし、木下克己、伊藤 恵、岡本恒治、岩井克允を調査員とし、掛川西高等学校郷土研究部の協力を得て実施した。
3. 本書の執筆は次のとおりである。

第1章 久永春男

第2章 岩井克允

第3章 伊藤 恵

第4章 木下克己

第5章 岡本恒治

第6章 岩井克允

第7章 久永春男

4. 本書に収録した写真は、久永春男、木下克己、伊藤 恵、岩井克允が撮影したもので、実測図の作成は執筆者が分担した。

5. 編集には岩井克允があたった。

6. 発掘調査の参加者は次のとおりである。

掛川市職員 柏原金三郎、山本 修、安達 啓、清水 功、鈴木五男、松本敏春、
戸塚辰三、佐藤益男、岩本克治

掛川西高等学校 永田正一、石山博己、岩沢光高、服部 孝、小杉有三、秋山とく、
鈴木八重子、八木由美江、戸塚律子、杉山あき

地元作業員 原田りつ、杉山よう、柳瀬まさ、齊藤よし

水垂二ッ池古墳群

目 次

序	1
例 言	2
第1章 水垂二ッ池古墳群の位置と地形	7
第2章 調査の経過	10
(1)はじめに	10
(2)発掘調査日誌	12
第3章 でんでこ山古墳	15
第4章 下清水第1号墳	19
第5章 E地点特殊遺構	26
第6章 下清水第2号墳	29
第7章 結語	34
付 載 各和金塚古墳について	37

挿図目次

挿図第1	水垂二ッ池古墳群位置図	7
挿図第2	水垂二ッ池古墳群分布図	8
挿図第3	水垂二ッ池古墳群地籍図	11
挿図第4	でんでこ山古墳墳丘平面図および断面図	15
挿図第5	でんでこ山古墳南西一北東トレンチ断面図	16
挿図第6	でんでこ山古墳第1号土塚(1)と第2土塚平面図および断面図	17
挿図第7	でんでこ山古墳第2埋葬塚出土土師器実測図	18
挿図第8	下清水第1号墳墳丘平面図および断面図	19
挿図第9	下清水第1号墳埋葬塚平面図および断面図	20
挿図第10	下清水第1号墳埋葬塚内出土の鉄劍	22
挿図第11	下清水第1号墳埋葬塚内および副塚出土の鉄鎌(1~17)・刀子(18)・鏡(19)	23
挿図第12	E地点特殊遺構の地形平面図および断面図	27
挿図第13	E地点であらわれた配疊遺構	28
挿図第14	E地点特殊遺構出土土師器実測図	29
挿図第15	下清水第2号墳墳丘平面図および断面図	30
挿図第16	下清水第2号墳埋葬塚平面図および断面図	32
挿図第17	下清水第2号墳出土須恵器実測図	33

図版目次

図版第1	水垂二ッ池古墳群遺跡の全景（南から）	39
図版第2	でんでこ山古墳の調査	41
	(1) 墳丘（北西から）	
	(2) 南北トレンチ南部西壁断面（東から）	
図版第3	でんでこ山古墳の調査	43
	(1) 埋葬塚（右・第1号埋葬塚、左・第2号埋葬塚）（西南から）	
	(2) 埋葬塚内出土土師器（上段・第1号埋葬塚下段・第2号埋葬塚）	
図版第4	下清水第1号墳の調査	45
	(1) 墳丘（南から） (2) 墳丘（西から）	
図版第5	下清水第1号墳の調査	47
	(1) 鉄剣と鉄鎌の出土状態（東から）	
	(2) 埋葬塚と副塚（北から）	
図版第6	下清水第1号墳の調査	49
	(1) 鉄剣 (2) 刀子・鉈 (3) 土師器	
図版第7	下清水第1号墳の調査	51
	鐵 織	
図版第8	C地点およびD地点の調査	53
	(1) C地点（北から）	
	(2) D地点（北から）	
図版第9	E地点特殊遺構の調査	55
	(1) 墳丘（西から）	
	(2) 東西トレンチ西部北壁断面および配礎遺構（南から）	
図版第10	E地点特殊遺構の調査	57
	(1) 浅いピット状遺構（南から）	
	(2) 出土した土師器	
図版第11	下清水第2号墳の調査	59
	(1) 墳丘（南から）	
	(2) 墳丘およびトレンチ（北から）	
図版第12	下清水第2号墳の調査	61
	(1) 東西トレンチ東部北壁断面（南から）	
	(2) 須恵器出土状態（北から）	
図版第13	下清水第2号墳の調査	63
	(1) 埋葬塚（南から）	
	(2) 出土した須恵器	

第1章 水垂二ッ池古墳群の位置と地形

掛川駅の西100mの地点を基点として北進する県道家山・掛川線を750m行くと、国道1号線との交差点にでる。そこから東へ折れて600m国道1号線を行くと左側（北側）に北池があり、その東縁を廻って水垂へ行く道がある。

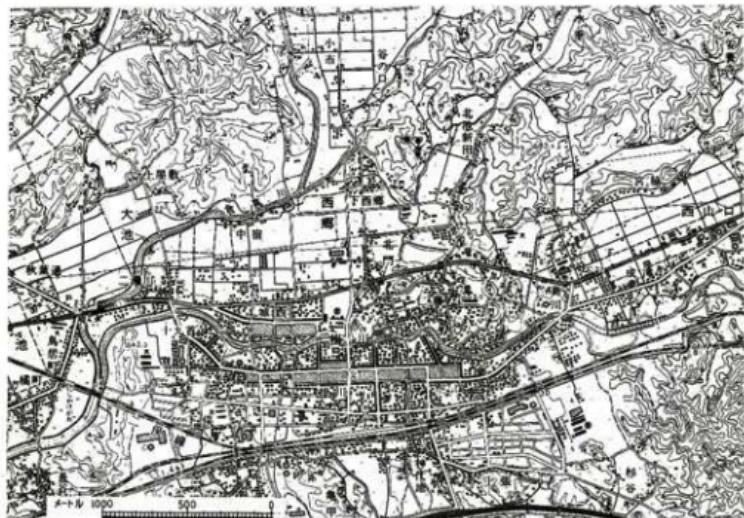
その道を山沿いに曲りくねりながら400m北へ行くと、水垂川の谷を東西に横ぐる道が左手に分岐している。その道が西へ突き当ったところに数軒の人家があり、その背後には低い丘陵があって、二ッ池と呼ばれる灌漑池をいたいでいる。この池が城北小学校建設用地として、このたび東側の支丘を削って、埋めたてられることになったのであるが、この二ッ池をかこむ東側の支丘の基部近くに3基の古墳があることが、これまで知られていた。(註)

しかし、このたびの調査によって、支丘の中腹にも1基の古墳があり、支丘の基部から西北西70mの地点にも1基の規模の大きい古墳があることがわかった。

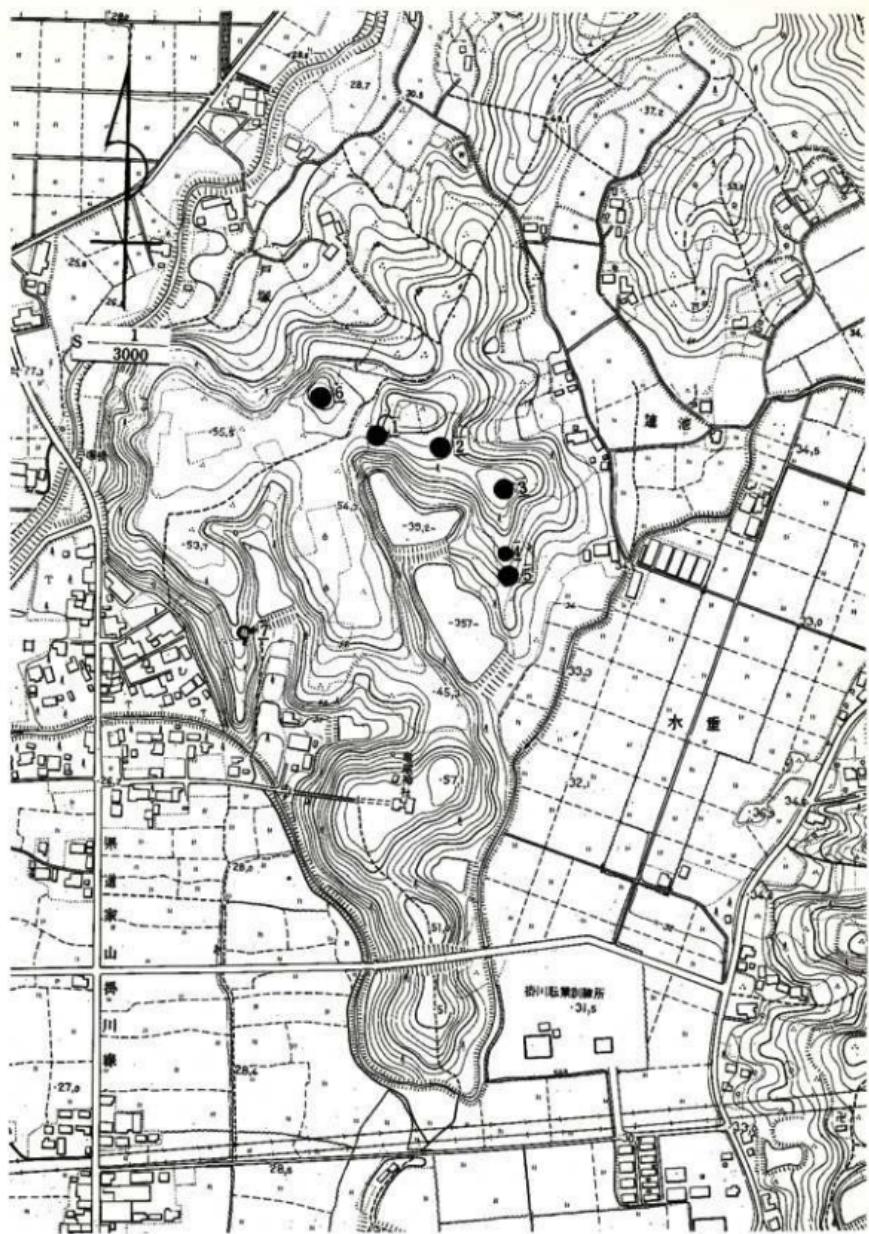
また、二ッ池から丘陵を横切って西へ120mの位置にある中宿池の西南隅にあたる丘陵の南側斜面に横穴群があることがわかった。

すなわち次表のごとくである。

註)『静岡県埋蔵文化財図地名表』1965年 静岡県教育委員会



插図第1 水垂二ッ池古墳群の位置



挿図第2 水垂二ツ池古墳群分布図

水垂二ツ池古墳群一覧表

(挿図第2 参照)

番号	遺 跡 名	所 在 地	標 高	地 目
1	八 景 山 古 墳	下西郷字原新田 ⁵⁸ ₅₉ 番地	64~65 m	山林
2	で ん で こ 山 古 墳	" " 61番地	65~66 m	"
3	下 清 水 第 1 号 墳	水垂字下清水183番地ノ1	62 m	"
4	下清水E地点特殊遺構	"	52~54 m	"
5	下 清 水 第 2 号 墳	"	49~50 m	"
6	原 新 田 古 墳	下西郷字原新田50番地ノ1ノ1	81 m	畑
7	原 新 田 横 穴	" " 72番地ノ1ノ1	40 m	山林

備考 原新田古墳は現状が開墾され茶畠となっているため、墳形が明確ではないが、
大型の円墳があるいは前方後円墳かもしれない。
(久永春男)

第2章 調査の経過

I. はじめに

昭和46年8月、掛川市立城北小学校建築用地として、掛川市下西郷字原新田および掛川市水垂字下清水の上池・下池を含む周辺の地域が選定された。その用地造成にあたっては、池を埋めるためにその周辺の山の一部を削り取り、それがあてることになった。

しかし、当該位置附近には静岡県埋蔵文化財包装地地名表(昭和40年)にNo.1110(天王山第6号墳)、No.1112(天王山第7号墳)、No.1112(天王山第8号墳)として3基の古墳が登載されているため予め調査することになった。

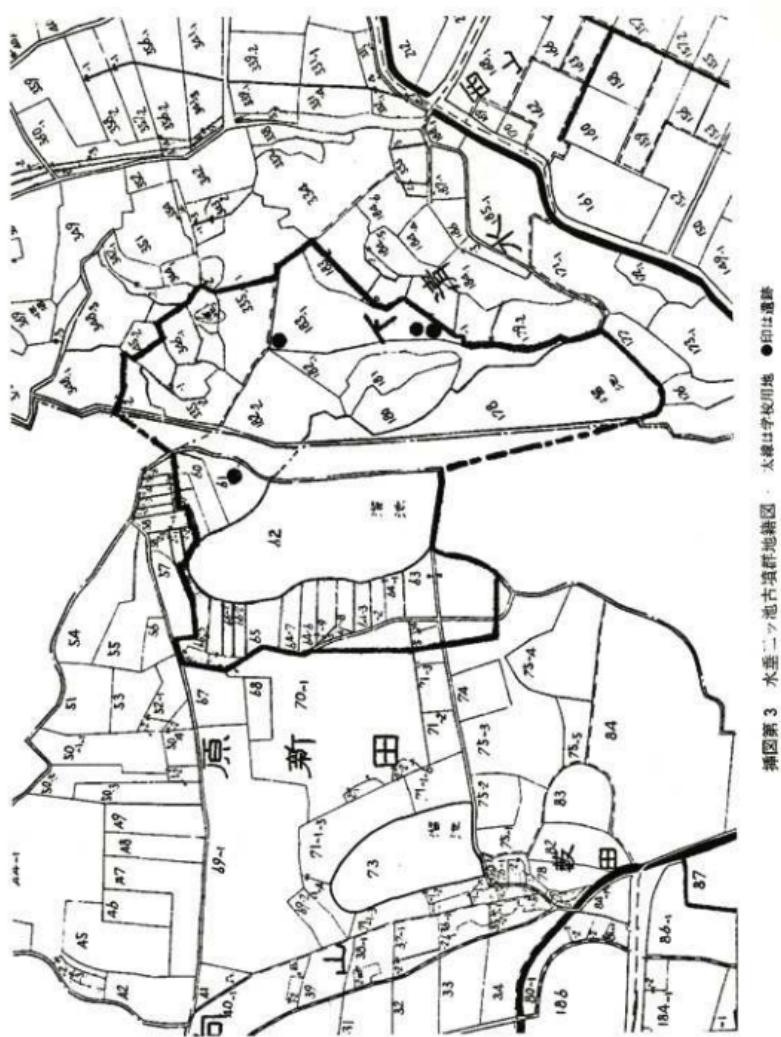
そこで掛川市教育委員会は静岡県教育委員会社会教育課にその旨連絡したところ、昭和48年2月26日に調査担当者として寺田義昭氏の推薦をうけた。3月12日、寺田氏が現地を踏査した結果、静岡県埋蔵文化財包装地地名表に登載のNo.1110は古墳であることが疑わしく、No.1111を調査し、No.1112は保存することに決定した。そして3月20日から4月5日までの15日間に調査を行なう予定をたて、発掘届を準備したところ、3月16日になって、寺田氏から勤務先の転任が決り、発掘調査の担当を辞退したい旨の申し出があった。

そこで急便遠江考古学研究会に適当な調査員の斡旋を依頼したが、おりから袋井市鶴松遺跡を調査中であり、引続いて島田市の国道一号線のバイパス建設に伴なう古窯跡の調査を予定されているので調査担当に廻し得るメンバーがないとの回答があった。

3月19日、再び、静岡県教育委員会社会教育課にこの旨を報告するとともに、静岡県職員の中から適当な専門家の派遣を要請したが、県自体も多忙で、派遣し得る人手がないとのことで、愛知県の日本考古学協会員久永春男氏を推薦され、静岡県教育委員会から直接連絡し、斡旋することであった。

掛川市教育委員会においては3月20日久永春男氏宅を訪ね調査担当を依頼した。3月23日久永氏は、市側とともに現地を再踏査し、地名表に登載されている3基の他にNo.1110(天王山第6号墳)から南に下る尾根筋にもコブ状の地脈れがいくつかあるので、それらも遺跡を破壊するにあたっては疑わしきはすべて調査するという原則のもとに加えて調査することになった。直ちに担当者を変更した発掘届を提出し、3月26日までに市側において下刈りを行ない、3月27日から調査を開始することに決定した。

調査団は、久永春男氏を担当者として、他に調査員として木下克己、伊藤 恵、岡本恒治の3氏のほか岩井克允があたり、掛川西高等学校郷土研究部の参加を得、また教育委員会側としても可能な限り要員をだすことになった。



II. 発掘調査日誌

3月23日(金) 現地を踏査する。静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表には用地附近には3基の古墳が登載されているが、そのうちの1基は確實に古墳と目しうるが、その他にもいくつかの類似した地盤が認められた。そこで直ちに下刈りをして地盤を確かめ、測量することにした。

なお古墳の西側の台地上に弥生式遺跡がすでに登載されているので、茶畠を踏査したが、敷蓋があって、土器片は直ちには認められなかった。また、地元の人の話にこの茶畠の西の谷を越えたところに、ほら穴があるというので、案内してもらったところ、通称中宿池の南西側の山腹をめぐる小道を2mほど登ったところに、幅狭い平地があり、その北側の山腹にまぎれもない横穴墳墓が一つ開口していた。なお周辺にもそれとおぼしき個所があったが、それらは開口していなかった。

3月26日(月) 調査区域の下刈りを行なった。

3月27日(火) 下刈りを行なった結果、静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表に載っている3基と、その他に古墳類似の地盤は、4ヶ所あることがわかった。そこで、保存が決定しているNo.1112(第8号墳)を除いて、高い方からA・B・C・D・E・F地点といちおう名付け、等高線の単位25cm、縮尺50分の1で測量を開始した。地形からみて、中期の木棺直葬土塚の可能性が多く、また、もし古墳終末期の石室である場合も、南面の可能性が多いので、東西トレンチと万一を考えて、南北トレンチの抗打ちを行なった。

3月28日(水) 雨のため中止。測量図を検討する。

3月29日(木) 発掘再開。A地点は、東西トレンチ、南北トレンチを入れる。B地点は、東西に平行の三条のトレンチを掘った。

3月30日(金) A地点は表土下の非常に浅いところに黒色土層の抜りがあるのを確認した。局部的には地山の風化した岩盤が露出しているので土塚の疑いが濃い。

B地点では第2トレンチの中央よりや、東寄りの北側沿いに黒色土層がつまつたピットの南端を見いたした。その黒色土層の上面から土師器が検出された。

3月31日(土) 午前中小雨。午後、D地点、E地点の測量を行なう。

4月1日(日) A地点、黒色土層の抜がりおよび範囲を確認し、南北トレンチの北側の断面図を作成する。黒色土層中から土師器の小片がみつかった。

B地点、南北第2トレンチの黒色土層を掘りさげると鉄鏃が出土した。そこで黒色土層の方向を追ながら南北第2トレンチを掘ったところ、黒色土層の中間が深く落ちこんでいて、その下部から刀または剣とおぼしい鉄製品が現われた。それは2つに切断され、1つは約10cm下部に落込んでいた。古墳であることが明確になった。

4月2日(月) B地点、南北第2トレンチの断面を整理し、U字形をした埋葬坑の中に

鉄鏃と剣があることがわかった。第2トレンチの南側に褐色土の詰ったピットのあることがわかり、それを少し掘り拡げると、その西寄部分にや、幅広い鉄鏃の一端が見いだされ、埋葬塚と推定される黒色土層の落込みの範囲を確認した。埋葬塚を保護するためシートをかぶせる。

4月3日(火) A地点、トレンチの断面を検討した結果、東西トレンチの末端の表土直下に遺構が存することを認めた。第1遺構とする。

B地点、剣の北半が落込んでいるピットの範囲を掘りさげる。一方、第2トレンチの南側に現われたピットを掘りさげ、その西寄部分に鉄鏃が切先を下にして突き刺さり、またピットの中央部に鉄鏃の東が切先を南に向けて埋っているのを見いだした。そして、このピット中央部の東の鉄鏃の上から甌が南北方向に検出され、その下部から鉄鏃の東が見いだされた。帰りかけシートをかぶせる。

C地点およびD地点、十字形にトレンチを設定し、発掘したが、表土直下に地山が現われ、遺構はなかった。

F地点、十字形にトレンチを設定し、発掘にとりかかる。

4月4日(水) 雨のため中止。実測図を検討し、整理する。

4月5日(木) B地点に集中して発掘を進める。まず、東西第2トレンチ内に現われた埋葬塚の断面の実測図を作成したのち、鉄器類の横たわっている埋葬塚の壁を明確に出しながら掘りさげる。また南部の鉄鏃類の納まっているピットの範囲を追って掘りさげたところ、剣の切先よりもや、高い位置から鉄鏃が数個、東西方向あるいは南北方向に雑然として現われた。夜、雨のおそれがあるので、帰りぎわに再びシートを被せる。

E地点、十字形にトレンチを設定し、発掘にとりかかる。中央部から少し北にかけて黒い有機土層が現われた。

4月6日(金) B地点、埋葬塚の黒色有機土をは、掘り終る。剣の南端が落ちこんでいる部分が幅50cm、長さ85cmの小さい長方形であることが明確となった。南端部のピットは東側と西側の2つがあり、東側は浅くて底が凸凹した地山であり、遺物は認められなかつた。西側は10本余りの鉄鏃の東であることがわかつた。遺構と出土遺物の位置を平板測量する。

B地点とC地点の中間に2条、C地点とD地点の中間にも1条の補助の東西トレンチを設定し、発掘したが、やはり表土直下に地山が現われ、遺構はなかつた。

E地点、十字形のトレンチで4区分された南西部に河石(角砾)を東西1.7m、南北1.4mの楕円形に置き並べた遺構が見いだされた。その下部は黒色有機土層である。南北トレンチの北部東壁断面図を作製する。配砾遺構の全形写真を撮る。その角砾を並べた北側斜面から土師器の細片が検出された。

F地点、有機土層を追って掘り下げ、中央部に現われた黒色土層の南端と北端を確めた。長さ約3mである。

4月7日(土) A地点、埋葬坑の方向を確認るために、東西トレンチの西側に東北から南西にトレンチを掘りさげたところ、遺構が見いだされた。第2遺構とする。

B地点、埋葬坑中央部の剣の茎の部分と東側に東西方向に横たわる鉄錆1本の位置を平板測量し、埋葬坑の床面を清掃する。

E地点、東西トレンチの西部北壁断面図を作製する。配礫遺構に20cmおきに基盤割りに糸をはり部分写真を撮る。

F地点、ほぼ南北方向に細長い遺構全形を露出させる。遺構の範囲の平板測量を終る。

F地点、南北トレンチの北部の地山面に須恵器片が検出されたので、その西側を掘り下げたところ、さらに、数片の須恵器片が現われた。

4月8日(日) A地点、第1遺構と第2遺構を発掘し、遺構の東西方向と南北方向の断面を測量する。

B地点、遺構の平面を補足測量する。

E地点、配礫遺構の礫群を取り除き、その下部の黒色土層を掘り下げた。遺物は何も検出しなかった。南北トレンチの北西部の黒色土層から数個の土師器片を検出し得たのみに終る。

F地点、東西トレンチの北部を東側に掘り下げた。遺物は何も検出しなかった。

4月9日(月) A地点、第1遺構および第2遺構の掘り足らぬ部分を掘り加え、壊れた部分を補修し、遺構の形態を確認する。ついで、遺構の範囲を平板測量する。第2遺構の床面から土師器片が出土した。墳丘西方に前方部状をなして、長く抜がる平担部の中央部に東北東-西南西にトレンチを掘る。2ヶ所に有機土層を認めたが、遺構ではなかった。

E地点、北西部の黒色土層を掘り下げて現われた斜面のピットと配礫遺構の下部のピットが続いたような形となったが、厳密に観察すると、2つの浅い遺構が重なっている。遺物は何も検出しなかった。遺構の平板測量と高低測量および写真撮影をして終る。

A地点、B地点、E地点の遺構の写真撮影をして発掘調査を終了した。

なお、A地点は、通称でんでこ山と称しているため、でんでこ山古墳と名付ける。B地点、E地点、F地点は、字名から、B地点を下清水第1号墳、E地点をE地点特殊遺構、F地点を下清水第2号墳とそれぞれ名付ける。

(岩井克允)

第3章 でんでこ山古墳

位 置

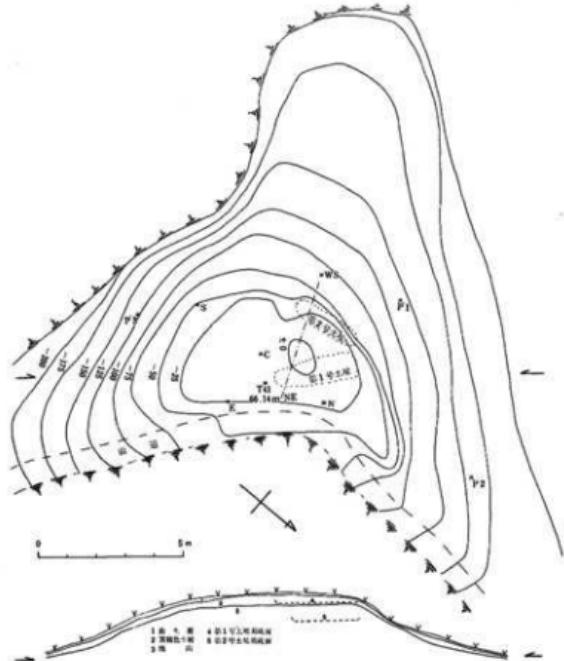
本墳の地籍は、掛川市下西郷字原新田61番地に属する。

本墳は、二ッ池の奥の上池の北東に望む丘陵の頂部に位置する。その最高地点は標高66.14mである。

調査経過

墳丘上の雑木を伐採後、墳丘の写真を撮影する。墳丘実測図は等高線を25cm間隔にとり-200cmまで測定する。墳頂部をセンターとして東西南部に杭を打ち、東西12m、南北17m、幅70cmのトレンチを設定して、封土と地山との関係及び遺構の究明にあたった。

しかし、遺構の検出が明確になされなかつたため北と西の両トレンチを結ぶ南西-北東を軸とする長さ4m、幅70cmのトレンチを2条設定した。その結果、第1号土塙と第2号土塙が検出されたので、写真撮影、平面及び断面の実測図を作成し発掘を終了した。



挿図第4 でんでこ山古墳墳丘平面図および断面図

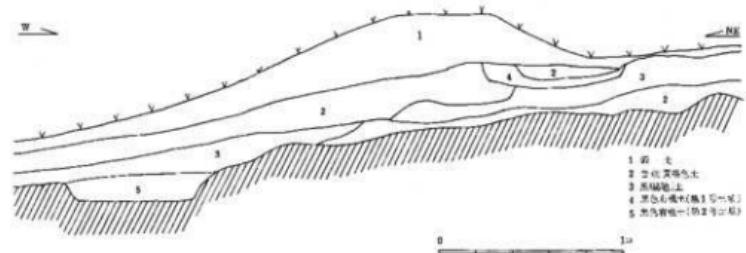
墳丘（図版第2、挿図第4）

発掘前、墳頂附近には、椎木が繁茂していたが、墳丘の南東部から北東部へは丘麓から上の山道が通り、その東側は崖状に崩れて急斜面をなしてて封土の流失が著しいが、南、西および北部は半月形に円弧を描き、原状をほぼ遺存しているものと推定された。

墳丘の測量の結果、現状において直径約13m、高さ約1.5mの円墳と確認されたが、墳丘の外面には葺石、埴輪等は検出されなかった。

墳丘に設けたトレントの観察によれば、墳丘上面には10~20cmの落葉等の堆積物を含む表土層が存し、その下には本米の封土である黄褐色土層が20~40cmの厚みで積成され、さらにその下部には黄褐色を呈する泥岩の風化した地山が基盤を構成している。

墳丘の築成に当っては、丘陵の稜線上にらくだの背の瘤状の丘頭部の地形を利用して、その四周及び墳頂部を削りならして墳丘の基底部を整地し、この上に盛土をなしたことが明らかであり、現状における封土は、墳丘北部よりも、中央および南部の方が比較的流失が少ない。復元した墳丘の径は16m前後、高さは2m前後存したであろう。



挿図第5 でんでこ山古墳南西一北東トレント断面図

遺構（図版第3(1)、挿図第5）

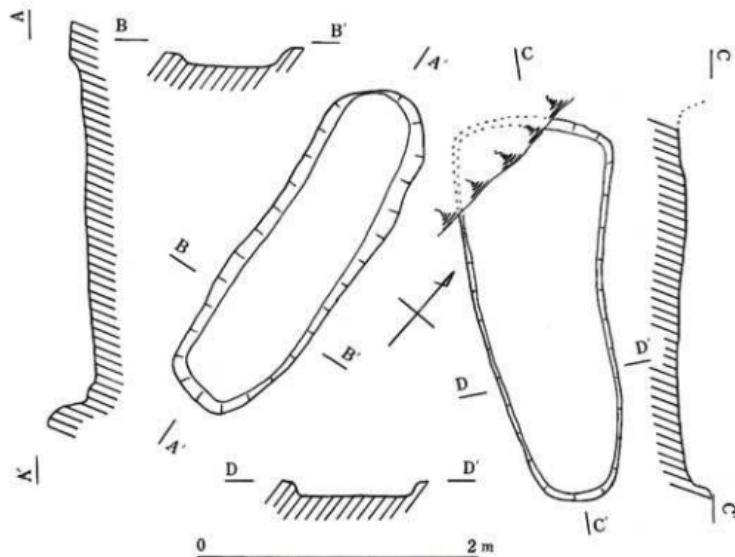
現在の墳丘中央部に設定した南西一北東トレントの断面に、現存する墳頂部から約40cm下に基底面をおき、封土中に掘りこまれた幅約80cm、厚さ約15cmほどの黒色有機土が認められた。これを精査すると南端で40~50cm、中央で85~92cm、北端で105~115cm（北西部が崖状に崩れているので推定）の幅をもち、中軸線上の長さ167~177cm、深さ10~20cmの南から30°東に偏する方法を主軸にもつ土坑が検出された。これを第1号土坑と仮称する。遺物としては、土師器の小破片（壺と甕）が数点北隅の埋土中から出土したのみである。

この第1号土塙の北端から25cmほど西方において第2号土塙が現われた。この土塙は、地山層へ約15cm掘りこまれ、基底面の高さにおいて第1号土塙よりも約60cm低い位置にあった。土塙中には黒色有機土が充満していたが、この土層中および基底面からは土師器（壺、盤）の小破片が10片ほど出土したのみである。

土塙の規模は第1号土塙よりや、小さく、幅は55~80cm、長さは250~260cm、深さは10~35cmを測る。南端では隅が角ばるが、北端では隅が丸く掘られていて、南北を主軸となしている。

両土塙は、北部では25cmと接するが、南部では240cmと八の字状に開き、その主軸の方向の差異に注意される。また、第2号土塙はその幅が均等であるのに比して、第1号土塙は北端が南端よりも幅広いことも特徴といえる。

さらに第1号土塙は墳丘の封土中に切りこんで營まれ、その上に盛土した土塙であるのに対して、第2号土塙は地山層への掘りこみが認められる点から、築造時期において第2号土塙の方が、若干第1号土塙よりも古いのではなかろうか。両土塙では各北端において5cm前後の円礫が十数個基底面に沿って認められたが、埋葬時に床面のレベル調整のために置かれたのか、何らかの祭祀的な意味があったものか明らかでない。



插図第6 でんご山古墳第1号土塙と第2号土塙平面図および断面図

遺物 (図版第3(2)、挿図第7)

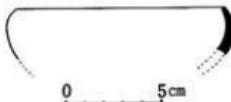
本墳から出土した遺物は土師器の破片のみである。第1号土塚からは厚さ5~7mmの赤褐色を呈する壺の破片と厚さ3~5mmの器壁の内外面にハケ目を有する黄褐色の甕の破片が出土した。いずれも胴部の小片で図示できない。第2号土塚からは第1号土塚出土の壺片と類似する破片の他に、盤(図版第3(2)、挿図第7)の口縁部破片がある。口径約12cm内外で、口唇は薄く内変しているのが特徴である。

年代と性格

本墳においては、第1号土塚と第2号土塚という複数の埋葬が認められた。そしてそれも両土塚が同時に築造されたものではなく、時期的に若干の隔たりのあることが推定せられる。また築造年代としては、出土遺物が土師器の小破片のみであるから断定できないが、この地方に須恵器の未だ広く普及しない時期、即ち5世紀末前後、と推定することもできましょう。

被葬者の性格は、副葬品の極めて乏しいことからみて普通の庶民層であろうが、墳丘の占地条件のすぐれていることは、その上層に属するものであることを示唆しているとも言えよう。

(伊藤 恵)



挿図第7
でんでこ山古墳第2号土塚出土土師器
実測図

第4章 下清水第1号墳

位 置

下清水第1号墳は上池・下池から成る二つ池の東側で、南北に伸びる小支丘の尾根を登り詰めた狭い平坦部に存在し、上池を西南西にのぞむことができる。でんでこ山古墳からはほぼ南東の方角に当り、その距離は約35mである。標高は、丘頂で62.5mを測り、水垂川の沖積地を一望できる地形で、地籍は掛川市水垂字下清水183番地ノ1に属する。

外 形

第1号墳の存在する地点は、かなり平坦であるが、その東側と中央西寄りとにわずかな高まりが見られた。この二つの高まりの間には、南麓からここを経てでんでこ山古墳方面へ通じる幅60cm前後の山路が、踏み凹められていた。中央西寄りの高まりは北西から南東へ横長く、また高まりの頂きは自然の山形の感じが強い。しかし、平坦部の東側に見られる地ぶくれは、南北の長さ約8m、東西の長さ約6mの半円状を呈している。この地ぶくれの高さは、西側からではほとんど感じられないが、地ぶくれの末端から急斜面で下る東側と南側からでは、50cmほどの高さに見え、低いながらも墳丘の名残りかと思われる円味もあった。だが、この地ぶくれの地表にも周囲にも、葺石、周石、埴輪など墳丘としての外部施設は何もみとめられなかった。

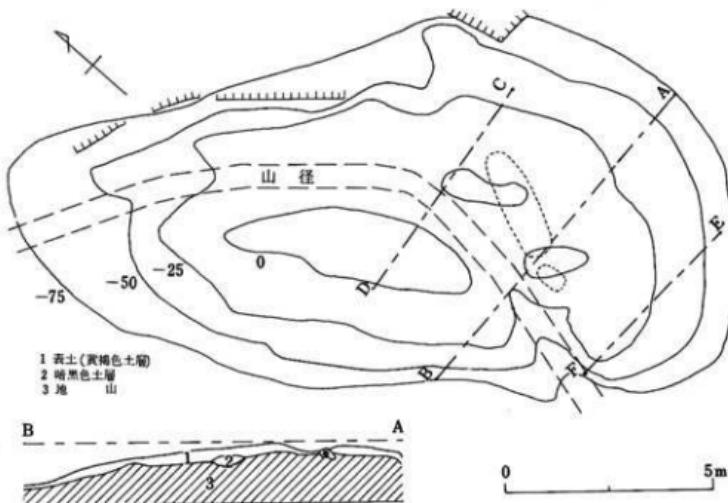
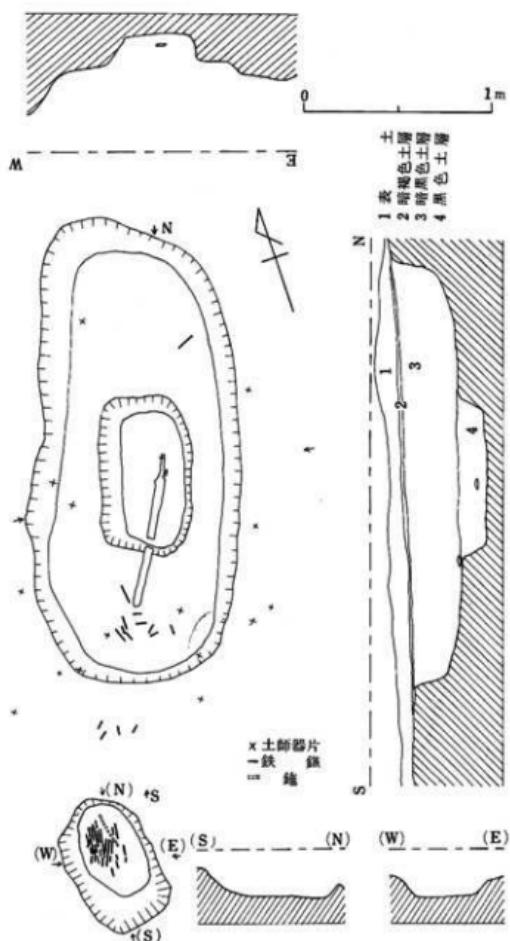


図8 下清水第1号墳墳丘平面図および断面図

調査の経過

この半円状の地ぶくれが古墳である場合、その埋葬方向は南北方向であることを推測してその中央部に、東から西けてトレンチA-Bを設定した。ついでこのトレンチの北側に2mの間隔をおいてほぼ平行なトレンチC-Dを、また、南側に約2.5mの間隔を置いてトレンチE-Fを設定した。これらのトレンチはいずれも長さ5~7m、幅約50cmの規模とした。トレンチA-Bの断面観察によれば、地ぶくれの見られる中央で7~8cm、東端および西端で4cm前後の厚さをなした表土層がある。第2層は暗褐色土層で、東端では5cmほどの厚みであるが、次第に厚みを増し、中央部では20~25cmほどの厚さをなし、西部でまたしだいに薄くなり、南麓へ通じる山路以西には見られない。この下層は地山で、黄色ないし灰褐色のシルト層で、地点によって泥岩の角礫を含んでいた。なお、このトレンチの中央部で、1m余にわたって表土層と第2層との間に1~2cmの厚さで黒色土層が挟まっており、この黒色土層から土師器の小片が検出され、所々に木炭と思われる炭化粉末もみとめられ



插図第9 下清水第1号墳構造平面図および断面図

た。

トレンチC-DおよびE-Fでは、遺構に関わる黒色有機土層の存在は全くみとめられなかつた。

そうして、トレンチA-Bの中央部西寄りでは鉄錠片が出土し、東寄りではトレンチの北壁に濃い黒褐色土の詰まった地山の凹みの南端が、地表から約30cmの深さで現れた。この黒褐色土層を北の方向へ追求した結果、トレンチC-Dの近くまで細長く存在し、濃い黒褐色有機土層は、木質が腐蝕したものであろうと思われた。なお、下部から鉄剣などが出土した黒褐色有機土層の除去によって土塙であることが推測された。

そうして、トレンチA-Bの南側でも黒褐色の有機土がみとめられたので、これを除去して多数の鉄錠をおさめた浅いピットを発見した。これらの土塙はいずれも、外形が地ぶくれ状をなす地点を中心とした区域で、地表から40cm前後の深さのところであった。

内部構造（図版第5(2)・挿図第9）

内部構造は、埋葬のための上下二段からなる土塙と、鉄錠群を副葬した浅いピットとから成り立っていた。

埋葬塙は、地ぶくれ部の中央に、黒褐色の有機土に埋って存在した。その上段の平面形は、長軸を北北東-南南西におく細長い隅円長方形に似た形であるが不整形な個所もある。南北の主軸の長さは上端で約2m=40cm、底面で約2m=20cm、東西の幅は上端が中央で約1m=20cm、南部で約1m、北部でも約90cmであり、底面が中央で約90cm、南部で約80cm、北部で約70cmを備る。この土塙は、地表から12cm前後にある地山を20~30cm掘り下げて、上段主要面がおおむね水平に造られていた。

この土塙の中央部に、北端から約70cm離れた地点を北限となるように、さらに掘り下げた下段面があった。この下段の土塙の大きさは、上端で南北軸の長さが約80cm、東西軸の長さが約50cm、底面では南北長が72cm前後、東西長が35cm前後のほぼ長方形をなしている。その底面は、上段土塙底面中央より15cmほど低く、地表面からは50cm前後の深さを測る。この下段の土塙には腐蝕した木質の混った黒色土が詰っていた。これは、かつてこの下段土塙に木棺を安置し、その上に鉄剣を置き、近くにも副葬品を供え、木棺の周囲に土を置いて木棺を安定させていたことが推測された。

この2段の面を持つ埋葬土塙の南側西寄りにピットが造られていた。このピットはほぼ南に向けた長軸の長さが上端で約70cm、底面で約50cm、また、東西の幅が中央上端で45cm、底面で30cmを測る。その形は、橢円形に近いもので、地山を13cmほど掘り込んでほぼ水平な床面を作り、表土上面からは25cm前後の深さとなっていた。

遺物の出土状態（図版第5(1)、挿図第9）

遺物は鉄製品が主なもので、鉄製品以外には土師器片が出土した。鉄製品は、埋葬塚と鉄鎌群を副葬した浅いビットから出土した。すなわち、下段の埋葬塚を埋めていた黒色有機土層の中央で、鉄剣の身が半分ほど茎がやや北東を指し、ほとんど水平に近い状態で出土した。これに連なる残りの剣身は、上段土塚南側で出土し、下段埋葬塚出土の半分と平面図では直線をなしてつながるように、鋒が南西に向いて水平に近い状態であった。両者の折れ口の間隔は約5cm、高さの差は11cmあった。

この鉄剣の茎の下からは、鋒の欠けた刀子が、茎をほぼ北に向けて、おむね水平の状態で出土した。

鉄鎌は、埋葬塚の南西にあった浅いビットから最も多量に出土した。このビットの中央やや西寄りで12個ほどの鉄鎌を束ね、その鋒は北向きにして横たえられていた。この束ねた鉄鎌の東側から2個の鉄鎌が別々の所で40cmほど離れ、鋒が下向きになつて発見された。このビット以外の地点から出土した鉄鎌には、埋葬塚からの10数個がある。すなわち、埋葬塚上段では、鉄剣の鋒のすぐ南側から鉄鎌2個が、鋒を下にして地中に刺さった状態で出土した。この鉄鎌の周りから5~6個分の鉄鎌が鋒の向きもまちまちに折れて出土した。また、この鉄鎌群から南西寄りの埋葬塚上段の縁端で破片となつた鉄鎌が4片出土し、その中には鋒が下向きのものもあった。

この外、棺をおさめた地点の北東の埋葬塚上段の壁前には、鋒を下にして地中に刺した状態の鉄鎌も1個あった。

施は、鉄鎌群を副葬した南側のビットの中で、束になった鉄鎌の東側において、鉄鎌よりやや高い地点から発見された。

土器片は埋葬塚のある地域を中心として、表土から8cm前後下の黒褐色土層の上端部に散在し、いずれも2~4cmの小破片のみであった。その数は17片ほどあるが、器形のわかるものはない。

土師器片以外には須恵器は1破片すら発見されず、玉類などの装身具も存在しなかった。



挿図第10 下清水第1号墳埋葬塚内出土の鉄剣

遺物 (図版第6・7、挿図第10・11)

鉄劍 (図版第6(1)、挿図第10)

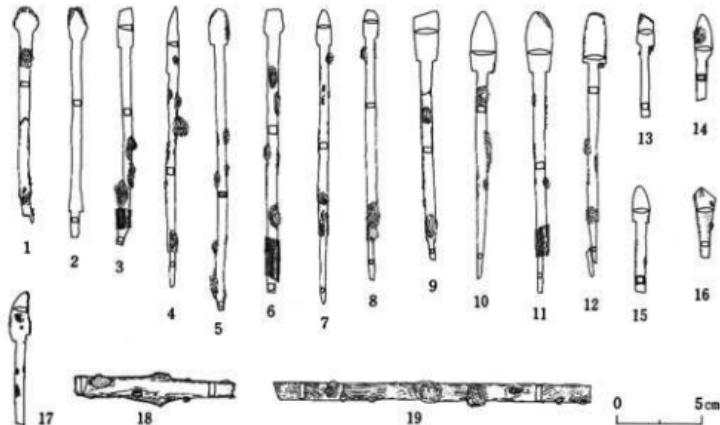
4片に折れて検出された鉄劍の全長は83.5cmである。身は長さ66.5cm、幅5cm、重ね約1cmを測る。茎は長さ17cm、中央の幅約2cmで断面はほぼ長方形をなし、茎尻は一字文字尻(註1)に作られ、間は直角の両関式である。目釘孔は1つあって間から約1cm離れた茎の中軸線に穿たれており、孔の直径は5mmである。鋒近くから身の両面にわたり、木質部の付着が認められ、この劍が木鞘に納められていたものと思われる。この痕跡の木質纖維は縦方向の柾目をなしている。

刀子 (図版第6(2)、挿図第11の18)

鉢の部と茎の末端とを欠いている。残存する長さは9.5cmで、棟の厚さは4mmである。身の長さは5.7cmほど残存し、その中央で身幅は1.3cmを測る。間は両関式で、棟間は明瞭な直角に作られているが、刀間は明らかでない。

鉄鎌 (図版第7、挿図第11の1~17)

完形および完形に近い鉄鎌は合計12個あった。破片として出土したものには、身の部分が6片、莖被や茎の部分が約15片ある。これらの鉄鎌はいずれも尖根鎌に属し、その形式は次のように分類される(註2)。



挿図第11 下清水第1号墳埋葬坑内および副坑出土の鉄鎌(1~17)・刀子(18)・鉢(19)

1. 篦被片刀籠式 3例ある。身が刀身形で長い箒被が茎との間にある。片闇造り(図版第7、挿図11の4)と両闇造り(図版第7、挿図11の3・17)とがあり、完形の挿図11の4は全長16.8cm、やや茎が欠けている例(挿図11の3)で長さ14.3cmである。

2. 篦被柳葉式 これも3例ある。ほとんど完形で出土し、いずれも両闇造りで長い箒被を有し、両丸造り(挿図11の11・12)と丸造り(挿図第11の10)とがあり、全長は約15~17cmである。

3. 篦被鑿箭式 11例ある。いずれも両闇造りで、そのうち、6例は完形または完形に近いものである。身は広鋒より狭鋒のものが多く、みな両丸造りと推定され、長い箒被をもっている。完形、または完形に近いものの全長は、広鋒の例(挿図第11の9)で約15cm、狭鋒の例(挿図第11の2・5・7・8・15)で16~18cmほどある。破片で出土した箒被鑿箭式の中には無闇の1例もある。

このほか、完形にかなり近い長さまで復元されながら、身の部分の欠損と腐蝕のため、形式の推定できなかったものが2例ある。茎の部分に竹の繊維質が、縱方向になって付着している6例もみとめられた。

箒 (図版第6(2)、挿図第11の19)

先端部を欠損して出土し、その残長は19cm、幅は約1cm、厚さは約3mmである。残存せる刃の部分はみとめられなかった。全面に腐蝕した木質繊維が付着しており、かつて木質の物で刃先以外のところを覆っていたことが推測される。

考 察

1. 年 代

本古墳は発掘前には古墳たることを疑うほどであった。それは、墳丘の欠損もあり、また墳丘の築造が自然の小さな地ぶくれと思われるほど小規模な外形だったことからでもあった。内部構造は、地山を掘り込んで埋葬土塙を造り、この土塙に木棺を置き埋葬をした。そして、鐵鎌や鍔を副葬するために別個のピットが造られていた。しかも、副葬品に須恵器がない点をも併せて考えると、これは古式古墳であり、少くとも古墳時代中期に属するものであろう。

次に、出土品には83.5cmと長めの鐵劍がある。多量に出土した鐵鎌には、平根式が1例もなく、いずれも尖根鎌であった。そうして、そのどれにも箒被があり、その長い箒被に、はっきり棘と認められるものはないけれども、茎に続く箒被の末端部の幅は、やや広がっている造りが数例あった。また、鐵鎌の形式が判別できるものは、鑿箭式が大部分であった。この鑿箭式は古墳時代後期に多く出土するものである。

以上のように、古墳の構造と出土品との両面から検討して、本古墳の築造年代は古墳時代中期後葉と推定したい。

2. 性 格

埋葬のための土塚はほぼ南北を向き上下二段から成っていた。上段は不整形ながら、 $250\text{cm} \times 70\text{cm}$ の長方形に近く、下段は $72\text{cm} \times 35\text{cm}$ と小規模な長方形であった。この上塚を使用した埋葬は先ず下段を主とした埋葬が最も普通の推測であろう。すなわち、遺体を納めた木棺を北枕にして下段埋葬塚に安置し、その上に刀子と鉄剣を置き、上段埋葬塚には鉄鎌を立てたり、横たえたりして置く。さらにこの埋葬塚の南に $50\text{cm} \times 30\text{cm}$ ほどの楕円状のピットを掘り、一括した鉄鎌を鏂と共に副葬している。もちろん、木棺や鉄製の副葬品の上には盛土し、上下埋葬塚の上部全域には、炭化物をうすく撒き、このあたりに土師質土器の破片も撒布したようで、墳丘も低いながら形成されたことだろう。

この場合、問題となるのは下段埋葬塚の大きさである。 $72\text{cm} \times 35\text{cm}$ の埋葬塚は木棺を作る時、その木材の厚さを差引くと約 $70\text{cm} \times 33\text{cm}$ の大きさとなり、成人のものとは程遠い。身長 70cm に最も近い小児の年令(註3)は、男子の場合は 69.5cm が生後7~8ヶ月、女子の場合は、 69.1cm で8~9ヶ月となっている。現代の小児の発育標準値をそのまま古墳時代に適用するのは正しくはなかろうが、この標準値と大差はあるまい。そこで、満1才にはならない小児の埋葬と推測したい。なお、男女の性別であるが、りっぱな鉄剣などが副葬されていたことから、成人、小児に関係なく男子と思われる。

ところで、この1号墳の場合、上段埋葬塚を主とした埋葬は成立しないだろうか。すなわち、上段埋葬塚に遺体を納めた木棺を安置し、その上や周りに副葬品を配し、下段埋葬塚は副室として副葬用などに使ったと考えられないだろうか。上段埋葬塚のほぼ水平に近い床面は南北長が2m近くあり、その床面から地表までは現在40cm近い深さであるから、物尺の点では合理性がある。このような上段埋葬塚使用の推測が不合理でなければ、成人の埋葬との推測もあり得るが、この点今後の例証を待って解決したい。

本古墳は、一応小児の埋葬だった可能性の方が強い。そして、副葬品として 80cm を越える鉄剣をはじめ、総数30個にも及ぶ鉄鎌を出土した。しかも、その鉄鎌を束ねて副葬するために、特別のピットまで作っていた。玉類などの装身具こそ出土しなかつたけれど、これだけの武器を鏂とともに有したこの古墳の被葬者は、当時この地方における農民層の指導的位置にあった者の小児であったものと推測されよう。

もし、成人の埋葬であったとしても、被葬者の地位はほとんど同じと思われる。

(木下克己)

註1 後藤守「古墳時代前期の剣」(考古学雑誌第30巻3号 昭和16年)

註2 後藤守「上古時代鉄鎌の年代研究」(人類学雑誌第54巻4号 1939年)

註3 保健衛生協会「厚生省値 乳児身体発育平均値 昭和45年」

第5章 E地点特殊遺構

位 置

本遺構は、北から南に下る尾根の中ほどにあり、上池と下池の境のは、東方にあたる。尾根は、この地点では南へ約10度の傾斜で下っている。地籍は掛川市水垂字下清水183番地ノ1に属する。

外 形 (図版第9(1)、挿図第12)

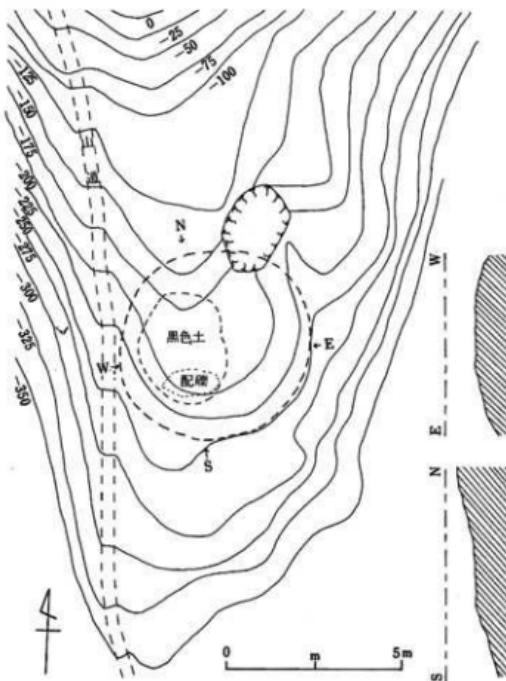
平面図が語るとおり東西方向では、直径約5mの墳丘状にも見える。断面図からいふと北から南へ降る斜面が水平にうつり、ややひろがりをもつ所に築かれた南北径約4mの墳丘ともうけとられる外見であり、この部分から南へは角度の急な斜面をなしでいる。

調査の経過

(図版第9-(2)、挿図第12)

トレンチを墳頂中央に東西に1条と、それに直交して南北に1条、十字形に交叉して設定した。長さ約6mの南北トレンチにおいては、地山の面は北側から約20度の角度をもって約1.5m下っており、そこからは、水平にうつっている。

地表は、地山面と約75cmのへだたりをもち、ゆるやかに南へ下っている。トレンチ北端より南へ約4mの位置から地表面は約20度強の角度をもって斜面をつくり、トレンチ末端の地山の面から地表



挿図第12 E地点特殊遺構の地形平面図および断面図

面までの厚みは約25cmとなっている。約5~10cmの厚みをもつ腐蝕土層を表層にして黄色シルト層の堆積が見られた。その黄色シルト層の下層から黒色有機土の詰まったピット状遺構があらわれた。

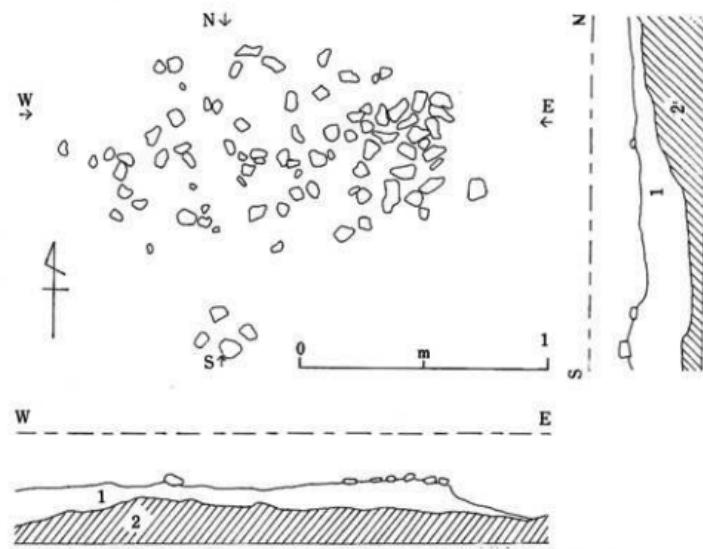
約5mの長さに設定した東西トレーニチにおいては、ほゞ水平な地山の面に対して、黄色シルト層の堆積は、両端より東に向って厚みを増し、中央部で約60cmの厚みをもっている。地表は、トレーニチ西端より東へ約1mの位置から中央部へ向かって約20度弱の角度をもってたかまり、中央部ではほゞ水平になっている。黄色シルト層の上に腐植土層の堆積があり、腐植土層は、トレーニチ西端より中央部にかけて約10cmの厚みがあり、東側に向かってうすくなっている。トレーニチのほゞ中央より西側にかけて黄色シルト層の下層に黒色有機土の堆積した浅いピット状遺構のきり込みが見られ、またトレーニチの中央部西側においてはその黒色有機土層上に石を並べた遺構がみつかった。両トレーニチの黒色有機土層を追って掘り下げた。

遺構 (図版第10、挿図第13)

黒色有機土の堆積は、墳丘の中央部より西側に拡がり、その形は南北に長い卵円形で、浅いピット状であった。

石を並べた遺構は、東西の長さ2m、南北0.8m前後の不整な橢円形であることがわかつた。使用された石は、辺5~7cm、厚さ5cm以下の角礫で個数80以上であった。

石敷の下部には遺物は何もなかった。北部の黒色有機土の詰まった浅いピットは石

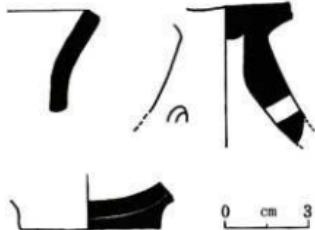


挿図第13 E地点であらわれた配石遺構(1 黒色有機土層、2 地山)

を並べた遺構の下層まで抜がっていた。東北部および西北部の黒色有機土層の中から赤焼きの土器片30数片が検出され、人為的施設であることがわかった。

遺物 (図版第10(2)、挿図第14)

ピット状遺構から出土した遺物は土器片のみである。高杯の脚部の残欠の他はすべて細片で合わせて30数片ある。高杯の脚部には2個の円い透かしが残され、その位置



挿図第14 E地点特殊遺構出土土器実測図

から推して3個の透かしがあけられていたものと推定される。脚の内側は、そいだ木片の先端によって抉り、条痕をのこし、甕の仕上げ手法を使って仕上げてある。杯底の中央部に出臍をつくり、脚の筒状部にはめてあり、王江式土器の特徴を備えている。壺の底部の断面には、底を張り足してつくり出してあることが見られた。甕の口縁部の細片には、木具による条痕が残され

ており、口縁部にきざみがある。推定される甕の器形は深鉢に近いもので、口頭部がなだらかに外反している。上器の細片の器形は高杯形、甕形、壺形などであった。

年代

この遺構で発見された遺物は土器のみで、それも大部分は細片であるが、高杯の脚部の一部が王江式土器の特徴を備えていることから黒色有機土の遺構は、古墳時代前期のものである可能性がある。石敷き遺構は、黒色有機土の上面にあったことから、年代的には同時代か、それよりも後の時期のものであると推定される。

性格

本遺構の黒色有機土層の抜がりは、東西約2m、南北約2.75m、厚さ30~50cm前後であり、形は不整楕円形で下層の地山に掘りこまれた部分ははなはだ浅く、人体を埋葬するに足るものではなかった。しかしこの有機土層に土器細片が含有されていたことから、人為的ピットと推定された。

石敷き遺構は、黒色有機土の上面にあり、並べられた角礫は、この尾根の岩盤のものではなくて、水垂川の河石が集められていた。これらのことから、この地点が埋葬遺構ではなく、住居址でもなく、或いは祭祠遺構ではないかとも思われる。

(岡本恒治)

第6章 下清水第2号墳

位 置

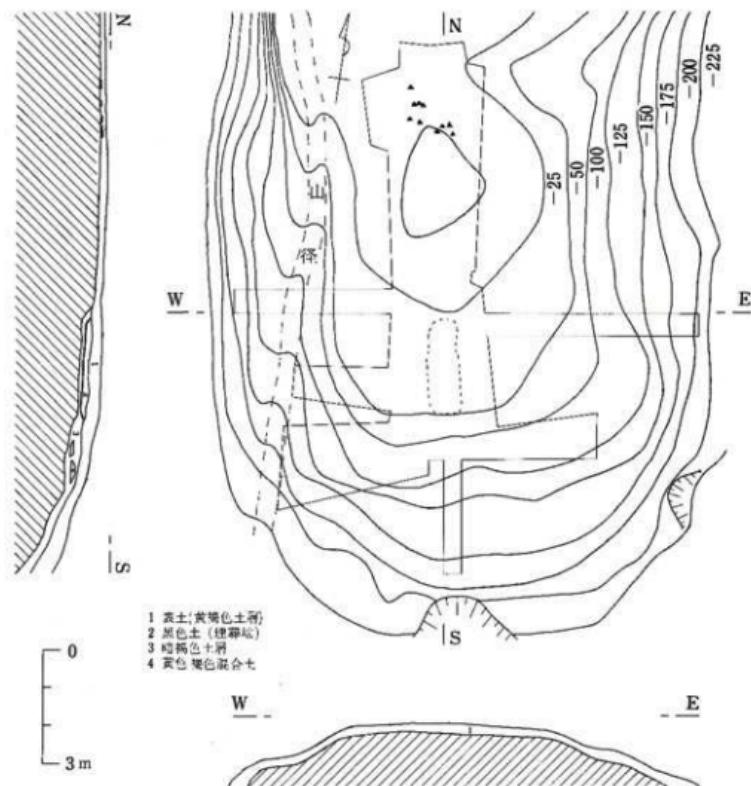
下清水第2号墳は二ッ池の東を北から南へゆるやかにさがる尾根の下部、下清水第1号墳から60mへだたったところに位置し、下池北端の東方にあたる地点である。

標高48mの等高線がほゝ墳裾を走っている。墳頂部の標高は50mである。

地籍は掛川市水垂字下清水183番地1に属する。

墳 丘 (図版第11、挿図第15)

墳丘は25cm単位の等高測量の結果、直径13m、高さ1.8m(復元して2m)の円墳であることが認められた。傾斜面に築かれているため、封土は大きく流れしており、墳丘の北部の平坦なところが最高点をなしているが、主体部はむしろ、その南側の傾斜面



挿図第15 下清水第2号墳墳丘平面図および断面図 (▲須恵器片)

(-25cm等高線から-50cm等高線の間)の下部に築かれていた。墳丘には葺石などの外部施設はなにも認められなかった。

調査経過 (図版第11(2)・12、挿図第15)

墳丘中央で十字形に交叉するように、東西に長さ9.5m、幅70cmのトレンチ1条A-Bと、それに直交する南北の長さ14m、幅70cmのトレンチ1条C-Dを設定して調査を開始めた。

南北トレンチC-Dの断面を観察すると、墳丘上面の北半部から中央部にかけては平坦になっており、表土が5~10cmの厚みで平坦に堆積している。その下部には黄褐色土層が約40cm平坦に堆積している。墳丘の中央部から南半部にかけては、ゆるやかな傾斜をもって表土が約10cm堆積し、その下部には黄褐色土層が15~30cmの厚さで堆積している。黄褐色土層の下部は、トレンチの北半部においては、ただちに地山となっている。地山面の状態は平坦に近く削りならされている。そして北端部分の地山面から須恵器片が出土した。

トレンチの中央部では黄褐色土層の下部に黒色土層が長さ2.7m、厚さ20cm堆積している。そしてこの黒色土層の断面形は両端の底部が上っている。

一方、東西トレンチA-Bの断面を観察すると、墳丘上面の中央部分はほぼ平坦になっているが、墳丘東部と西部はゆるやかな傾斜をなしている。そして表土層が中央部で厚さ10cm平坦に堆積し、中央部から西側と東側の裾部へと次第に薄くなって堆積している。その下部には黄褐色土層がトレンチの中央部では厚さ20cm堆積し、トレンチ中央部から東部の墳丘裾部にかけては40~60cmの厚さで堆積し、トレンチ中央部から西部の裾部にかけては約30cm堆積している。

トレンチ中央部の南北トレンチC-Dと直交する地点では、黄褐色土層の下部に黒色土層が長さ70cm、厚さ20cm堆積していることが認められた。この黒色土層の横断面形は上弦の弧を呈しており、南北トレンチC-D中央部の黄褐色土層の下部に堆積している黒色土層と堆積位置が一致していることがわかった。この黒色土層の堆積形態から木棺直葬の遺構と推定されたので、さらに追求するため黒色土層が括がっている部分を掘りひろげて遺構の全形を露出せしめるとともに、黒色土層のなかに多くの炭化物の細粉を認めた。

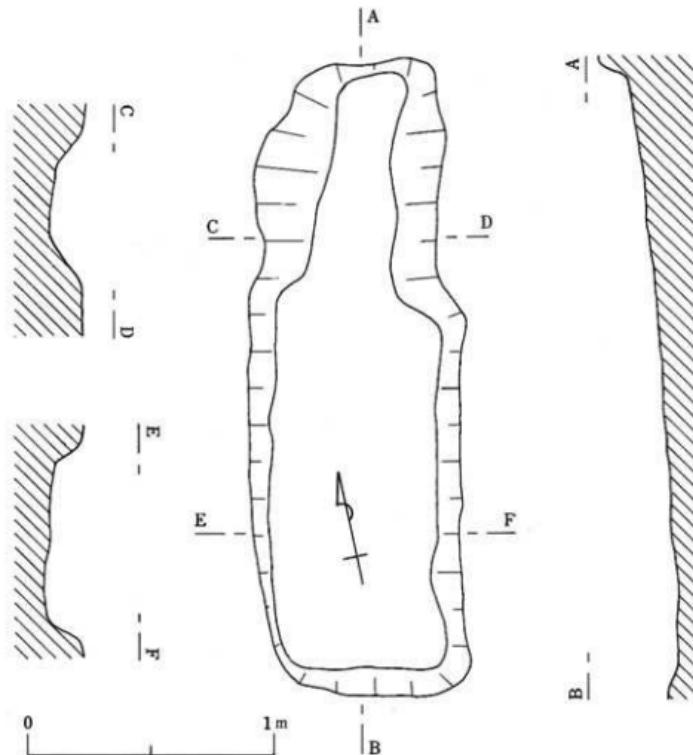
この結果黒色土層が堆積した部分は柄の短い鏡形の平面形をした埋葬坑であることがわかった。

黒色土層の下部には旧地表と推定される有機質の浸透した暗褐色土層が厚さ10cmほど存し、南裾部に向かって20~40cmみられる。そして南裾部の黒褐色土層のなかには黄褐色混合土が部分的に混入していた。おそらく本墳が築かれる際、北寄り部分の地山上表部を削り、それが混入したものと推定される。

暗褐色土層の下部は、南北トレンチC-Dの中央部では地山上表部が長さ3m、深さ30cmほど削られており、南寄り部分では急角度にさがり、長さ1.5m、深さ50cmほどおまかに削られ裾部へと続いている。地山面の状態は傾斜しながらでこぼこになっている。

内部構造 (図版第13(1)、挿図第16)

埋葬坑は中軸線を北13度西におき、平面形は柄の短い鎌に似ている。(註1)長さは2.6m、幅は鎌形の柄にあたる北側部分では70cm、鎌形の身にあたる南側部分では85cmである。深さは北側では15cm、南側では5cmである。底面は南へ5度の角度で傾斜している。壁は北端では67度の角度で上っており、南端では24度の角度で上っていて縦断面形は舟形である。



挿図第16 下清水第2号墳埋葬坑平面図および断面図

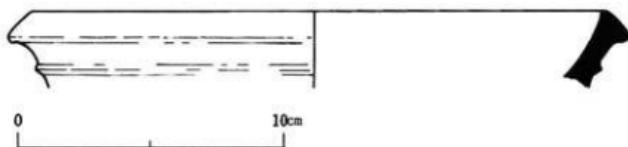
横断面形は北寄り部分では上弦の弧形である。南寄り部分は多少の掘りすぎはあるが、埋土を考慮すると北寄り部分と同じように弧形である。

この遺構につまっていた黒色土中に、かなりの量の炭化物が混っていたことから、これは木棺を直葬した土塚と考えてよかろう。そして木棺の身の横断面は弧形で、両端を軸先のように斜めに上げて仕上げた舟形である。

遺 物 (図版第13(2)、挿図第17)

埋葬場の内部からは遺物はなにも検出されなかった。しかし埋葬場の北端から北へ5.1mの地点の地山面からみいだされた須恵器の破片はあわせて17片で、そのうちの2~3片は地山面から10cm高いところの黄褐色上層から検出された。これらはおそらく埋葬の際、封土下に埋まつたものと推定される。

出土したすべての須恵器の破片は、1個体の大形の壺と推定される。口縁部が一片あるが、これから推計すると、口径はおよそ21.8cmである。口端は厚く作られており、厚さは1.4cmあり、外角は突出している。その口端から2cm下方には稜をもつ突帯が一条めぐらされており、文様はない。肩部は大きく張り、丸底らしい。肩から胴部にわたって一面に右傾する条痕が長く加えられているのは特徴的である。内面はほんのりながら仕上げられているが、なかには刷け目の部分と青海波状のたたき痕をうすく残している部分がみられる。胎土はよく精選され、焼成は良好である。自然釉が口辺部から上胴部にかけてみられる。須恵器の型式からいふと、第3型式の古い時期を降らぬもののごとくである。(註2)



挿図第17 下清水第2号墳出土須恵器実測図

年代と性格

内部構造が地山に浅い土塚を掘りこんでの木棺直葬であるところは、でんでこ山古墳や、下清水第1号墳と同一葬法であり、相近年代がいちおう考えられる。

しかし埋葬場北方の地山から検出された須恵器の壺は、口頭部に突帯を有することや、器面が斜めに長い条痕で仕上げられている点は古調を残すが、頭部に櫛描波文を

有しない点は第3型式の古い時期まで降る可能性もある。けだし、本質の築造年代はこの須恵器と同一年代とみなされ、すなわち6世紀中葉を降らない時期と考えたい。

なお、本墳は埋葬場の中には、副葬品がなにもなかった点では、おそらく被葬者は庶民層であったと考えられる。

註1 なお、これはむしろ掘り型であり、内部の真黒な炭化物のつまつた部分は炭化した木棺であって、発掘時にトレーナーを調べた段階では北から南に直線をなしていたことを付記したい。

註2 昭和42年に発掘調査した掛川市下西郷の天王山第2号墳は木棺直葬と推定され、出土した須恵器片は第3期前業（6世紀前半）のものとされている。

向坂綱二・平野和男・大谷純仁・寺田義昭・宮本豊彦・大崎辰夫『掛川市天王山遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会 1968年

（岩井克允）

第7章 結語

このたび、わたしたちが発掘したのは3基の古墳と1ヵ所の特殊遺構とであった。でんでこ山古墳は直径およそ11~12m、高さ約1.25mの円墳で、尾根筋の小隆起を利用して周囲を削り整え、上部には若干盛り土して墳丘を築いている。外部施設はない。墳丘の中央部より少し西寄りに地山を約15cm掘り下げて、北10度西に主軸をおく第2号土塙をいとなんだ後、墳丘東寄りの封土中に北50度西に主軸をおく第1号土塙がいとなまれていた。

第1号土塙は長さ約2.7m、幅は北端で100cm内外、南端で60cm、深さ15~20cmで、床面はほぼ水平である。北隅の埋土中から土師器片若干が検出された。

第2号土塙は長さ約2.6m、幅は80cm内外で、深さは15~20cmである。床面は北が南よりも2度高い。やはり埋土中から土師器片が若干検出された。

両土塙とともに底面には径5cm前後の円疊が10数個みとめられた。内部におさめた木棺の安定のために用いられたものであろうか。しかし、両土塙ともに副葬品は何も見いだされなかった。

両土塙の主軸の方向には40度のひらきがあり、床面は第1号土塙よりも第2号土塙の方が60cm低い。封土の層序から推しても、けだし、この二つの土塙がいとなまれた時期には若干のひらきがあるとみなしてよかろう。

土塙を埋積していた有機土中に包含されていた土師器片はいずれも細片のみで、型式を把握しがたかったが、須恵器を伴なっていなかったことはいちおう考慮に入れてよかろう。しかし、それよりもすぐ近くに立地条件を等しくして下清水第1号墳がいとなまれていること、この下清水第1号墳の埋葬場に埋積していた黒色有機土の上部からも類似した土師器片が検出されていることに注意したい。けだし、この二つの古墳の營造年代はさほど隔たってはいなかつたと考えてよかろう。

下清水第1号墳は現在は直径8m余り、高さ50m余りを測る小規模の円墳である。表土層はうすく、地表すれすれないし5~6cmで地山となり、尾根先のわずかな隆起を利用して円形に周囲を削り整えたのみのその墳丘には、外部施設はない。

墳丘のは、中央部に、は、南北方向(正確には北19度東)を軸としていとなまれた埋葬場は、や、不整な長円形で、全長約2.4m(底面2m)、東西の幅は70~80cm(底面50~60cm)で、北端と南端は円みをおびて狭まっている。地山を約30cm掘り下げて床面をしている。そして、その底面の北端から約70cmの地点から150cmの地点にかけて、その内底に、南北の長さ85cm(底面70cm)、東西の幅約50cm(底面33~35cm)、深さ約15cmの長方形の小竪穴がさらに掘りこまれていた。

長円形土塚の南端の床面には、数個の鉄鎌が不揃いに存したが、そこに鋒を南に向けた身の半ばをおき、^{さき}茎とそれにつづく身の半ばが長方形小豎穴上にまたがるようにおさめられた鉄劍が1口あり、その小豎穴にまたがる部分は折れて茎尻を小豎穴の床面にはま接し、劍身はその南壁に斜めにもたれていた。また、茎の傍には刀子1口が横たわっていた。すなわち、この鉄劍が横たえられたときには、小豎穴には木製の蓋がしてあったか、木製の箱のようなものがおさめられていて、後年にそれが腐蝕し崩れてしまったため、その上面の劍身が折れて落ちこんだと推定される状態であった。

なお、小豎穴内にはふかふかした黒色有機土が堆積していたが、その東壁沿いの部分にだけ約15cmの厚みで黄色土と有機土との混合土が固く詰められたような状態で存し、そのなかほどの深さから、鋒を南に向けて1個の鉄鎌が出土し、注意をひいた。

さて、この小豎穴を埋葬部とすると、被葬者は幼児ということになり、上部の南北に長い土塚は、副葬品をおさめた設備ということになろう。逆に上部の土塚に、遺骸をおさめた木棺が安置されたのだとすると、被葬者は北枕におさめられた成人で、下部のこの小豎穴は何らか腐蝕亡失してしまう品物をおさめた副塚のごときものということになろう。

なお土塚の主軸をややはすれて南西寄りに約50cmはなれた位置に、短径約50cm、長径約60cm、深さ10cmの不整楕円形の副土塚ともいいくべき掘込みがあり、内部には鋒を南にした鉄鎌が12個と鏟1個が揃えておかれており、その東西には突き立ててあったとおぼしい状態で鉄鎌が1個ずつ鋒を下にして突き刺さっていた。もし矢柄が装着してあったとすれば、その上端は封土の外表へ突出ていたのではないかと想像された。

埋葬塚が二段に造られているこの構造は、原野谷川流域の大字細谷の高代山第4号墳（注1）に類似している。副葬された鉄鎌は笠被壓箭式が主である点も高代山第4号墳のそれと一致するが、笠被片刃箭式が含まれているのは注意すべき相違である。けだしあるいは高代山第4号墳よりもやや遅れた年代、すなわち古墳文化中期末葉の營造とみなすべきであろうか。

そして、高代山第4号墳が規模は大きくはないが前方後円墳であるのに対し、下清水第1号墳は小規模の円墳にすぎない。下清水第1号墳の被葬者の社会的身分は、むしろ高代山第3号墳のそれに近く、地域小豪族層とみるべきであろう。そして、でんでこ山古墳の營造年代が下清水第1号墳とはま同時代であるるとすると、でんでこ山古墳の被葬者は、高代山第1号墳・第2号墳・第5号墳などと同じような庶民層であり、そこには明確な階層差が見られ、このでんでこ山古墳や下清水第1号墳の被葬者たちの居住していたムラは、高代山古墳群の基盤をなしたムラと同じく、すでに土地私有が生じ、共同体としての機能の解体がかなりすんだ段階にあったのではなかろうか。

下清水第2号墳は、下清水第1号墳の南約60m隔たった尾根筋の降り傾斜面に築か

れていた。このような傾斜面に自然地形を利用して築かれた墳丘はおしなべて自然地形との境がつまびらかでなく、墳丘の規模を明らかにしがたいが、直径13m内外、高さは斜面の下方から測って約1.8mぐらいの小規模の円墳である。

現在の墳丘の最高地点は墳丘の北寄りに位置し、埋葬塚は-25cm等高線と-50cm等高線の間の斜面下に存した。

墳丘北半部では地山を水平に削りならし、その北端近くの(すなわち墳丘北端部の)地山直上に須恵器の大形壺または蓋の破片が散布していた。その地点から南へ5mの間隔をおいたむかしの墳丘中央部に、地山の上表をなす暗褐色土層を掘込んで埋葬塚が営まれていた。長さ約2.6m、幅75~85cm、深さ約15cm、横断面は弧形をなし、炭化物の細粉を含む黒色土が内部につまっており、木棺直葬と推定された。

埋葬塚は中軸線を北13度西におき、底面は南へ5度の角度で傾斜し、北枕であったと考えられる。掘り型からすると、木棺は底面の両端が斜めにあがった剝り舟形であったかとも思われる。

埋葬塚内からは何らの副葬品も見出されなかつたが、北5.1mの墳丘下の地山直上に散布していた須恵器片が築造時のものとすると、この地域では古墳文化後期前葉まで土塚を掘って木棺を直葬し、それを墳丘で蔽う埋葬方法がまだ一般的に行なわれていたことになる(註2)。

なお、この古墳の被葬者が庶民層であることはいうまでもなかろう。

E地点で現われた特殊造構は、16度~18度の角度で南へ地山が傾斜する尾根筋の一地点を水平に削って、東西径約1.7m、南北径約70cmの不整橢円形で、深さ3~5cmの浅い凹面に掘り下げ、その上面を基点にして北方斜面にかけて黒色有機土層が、東西径約2.5m、南北径約3.2mの範囲にわたって堆積していた。そして南端の凹面部を蔽う黒色土中には何らの遺物も含まれていなかつたが、その上面には水垂川の川原で採取されたと考えられる小形碟80余個が東西約1.7m、南北約1.3mの不整形に並べ敷かれていた。北方の斜面の部分においては、黒色土中に古墳時代前期に比定される土師器である王江式土器の破片が30数片包含されていたが、この地点の黒色土層の上面には石敷きは及んでいなかつた。

造構の規模や様相から、あるいは祭祀造構ではないかと思われるが、なお今後の類例を持ちたい。

註1 久永春男・久保田久男『高代山古墳群』掛川市教育委員会 1970年

註2 大谷純仁・向坂綱二・寺田義昭・宮本豊彦・大崎辰夫・平野和男『掛川市天王山遺跡発掘調査報告書』掛川市教育委員会 1968年

二ヶ池古墳群の占地する丘陵の南端は天王山と呼ばれ、5基の古墳が存したが、1967年にそのうちの2基が発掘された。いずれも木棺直葬であったごくで、第2号墳からは大刀1口、鐵錐5個と須恵器の蓋杯の身1個が出土し、その蓋杯の型式から推して築造年代は6世紀前半に比定されている。

(久永春男)

付 載

各和金塚古墳について

掛川市の西部を流れる原野谷川の右岸の和田岡台地とその縁辺部にはすでに消滅したものと含めると20基以上の古墳が築かれていって、和田岡古墳群を形成している。

なかでも各和1719番地にある金塚古墳は墳丘の規模が最大であるばかりでなく、前方後円墳の型式がもっとも古式で、墳丘の前後に1基ずつ円形の陪塚をそなえていることで注目されていた。現況は松林となっていて、前方部の前端に送電鉄塔がたっているほかは墳丘が完存していた。

古墳の規模は全長約60m、後円部径40m、後円部高さ5m、前方部前端の幅15m、前方部の高さ2mである。墳丘は中軸線を北北西から南南東におき、前方部は南南東に向いている。

昭和48年5月この金塚古墳が何者かによって盗掘され、はなはだしく擾乱されている旨の報告をうけた。ただちに掛川市教育委員会は現地を踏査したところ、盗掘個所は後円部の中央部分と前方部南方の陪塚であることを確認した。

後円部の盗掘穴の入口は後円部の中央部分で、南北の長さ3.5m、東西の幅1.5mの盗掘穴を掘り、天井石をはずして内部に侵入し副葬品を盗みだしたあとが歴然として



(1) 盗掘穴とはずされた天井石



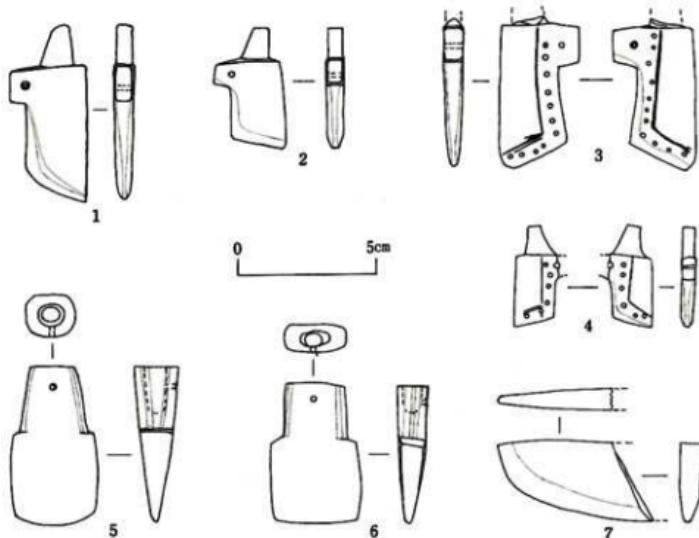
(2) 盗掘穴外周に捨てられた側壁の川原石

のこっていた。

盗掘穴には川原石を用いて竪穴式石室がそのまま露出していた。そこで盗掘穴の周囲に山積みされた封土でとりあえず盗掘穴を埋め戻すかたわら、その封土中および附近の草むらから副葬品の短甲類残欠、鉄剣および直刀類10口以上、鉄鎌、鉄斧などの鉄製品と石製模造品を採集した。石製模造品はいずれも滑石製で刀子4個、斧頭2個、石庖丁状製残欠1個で、その寸法は次表のごとくである。

(単位:cm)

番号	副葬品名	全長	突出部幅	備考
1	刀子 1	6.4	2.8	突出部に小円孔
2	* 2	4.4	2.4	突出部に小円孔
3	* 3	5.4	2.9	突出部に小円孔 輪部に小さな円い穴の点列
4	* 4	3.7	1.7	突出部に小円孔 輪部に小さな円い穴の点列
5	斧頭 1	5.8	最大幅(刀部幅) 3.1	斧頭に袋装をかたどった穴 基部の片側に小円孔
6	* 2	5.2	最大幅(刀部幅) 3.1	"
7	石庖丁状製品	5.7以上	最大幅 2.7	

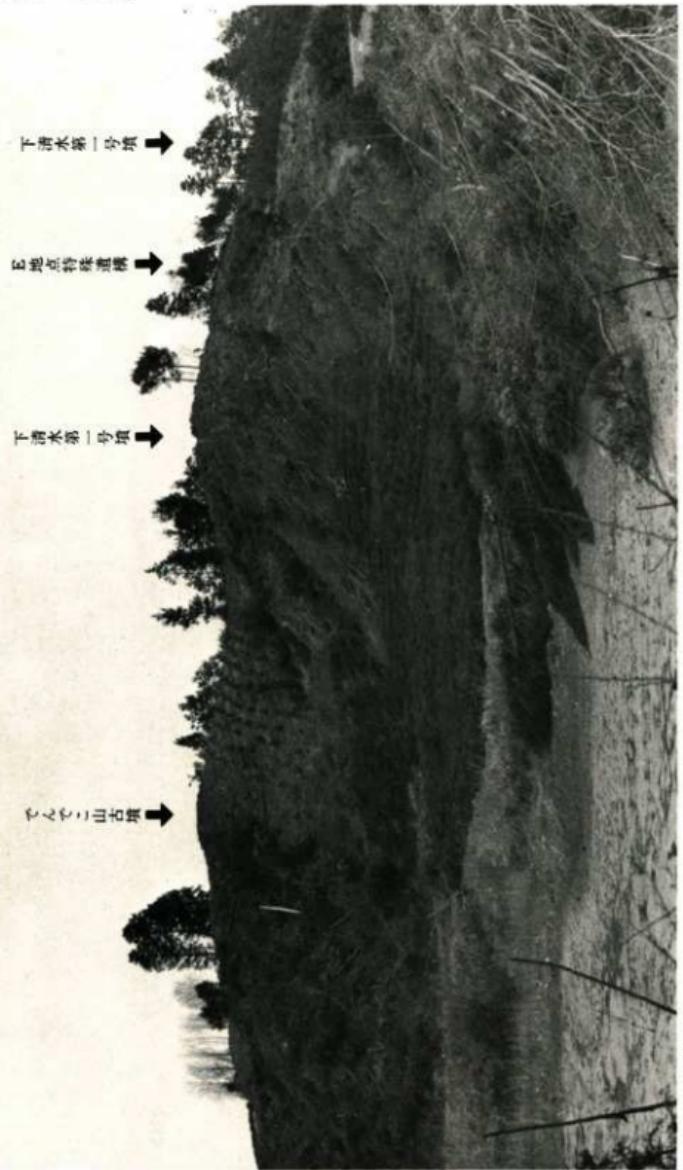


盗掘穴外周から採集した石製模造品

おそらくわれわれの採集した品々とは比すべくもない多くの副葬品が盗み去られたことは疑いなく、かえすがえすも遺憾にたえない。

(岩井克允)

図版第1 水垂二ヶ池古墳群



図版第2 でんでこ山古墳の調査



(1) 墓丘（北西から）

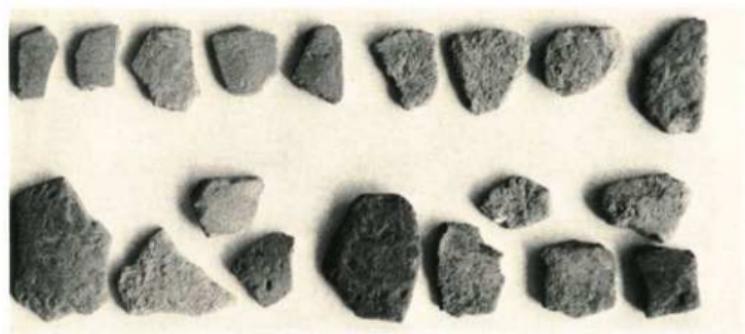


(2) 南北トレンチ南部西壁断面（東から）

図版第3 でんでこ山古墳の調査



(1) 埋葬塚（右・第1号埋葬塚、左・第2号埋葬塚）（南西から）



(2) 埋葬塚内出土土器（上段・第1号埋葬塚出土、下段・第2号埋葬塚出土）

図版第4 下清水第1号墳の調査

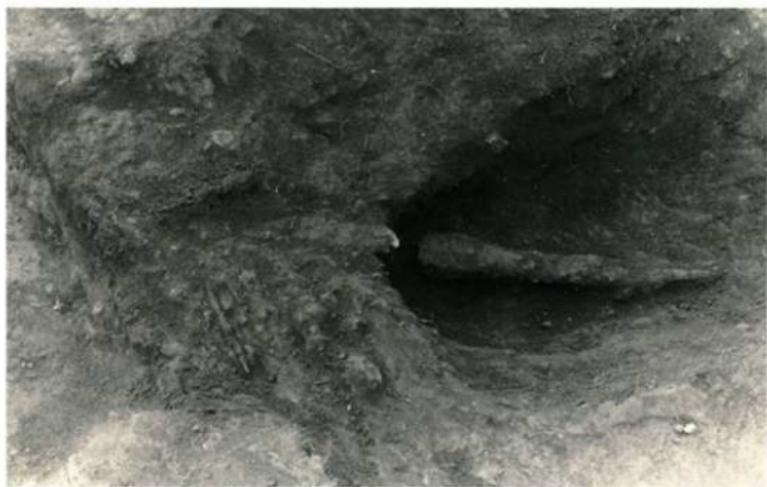


(1) 墳丘（南から）



(2) 墳丘（西から）

図版第5 下清水第1号墳の調査



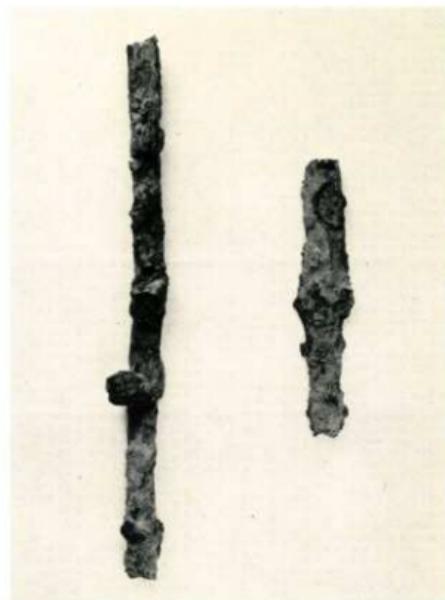
(1) 鉄剣、鉄鎌の出土状態（東から）



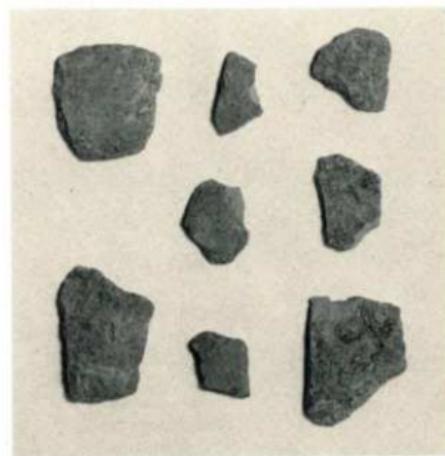
(2) 埋葬塚と副塚（北から）



(1) 鉄劍

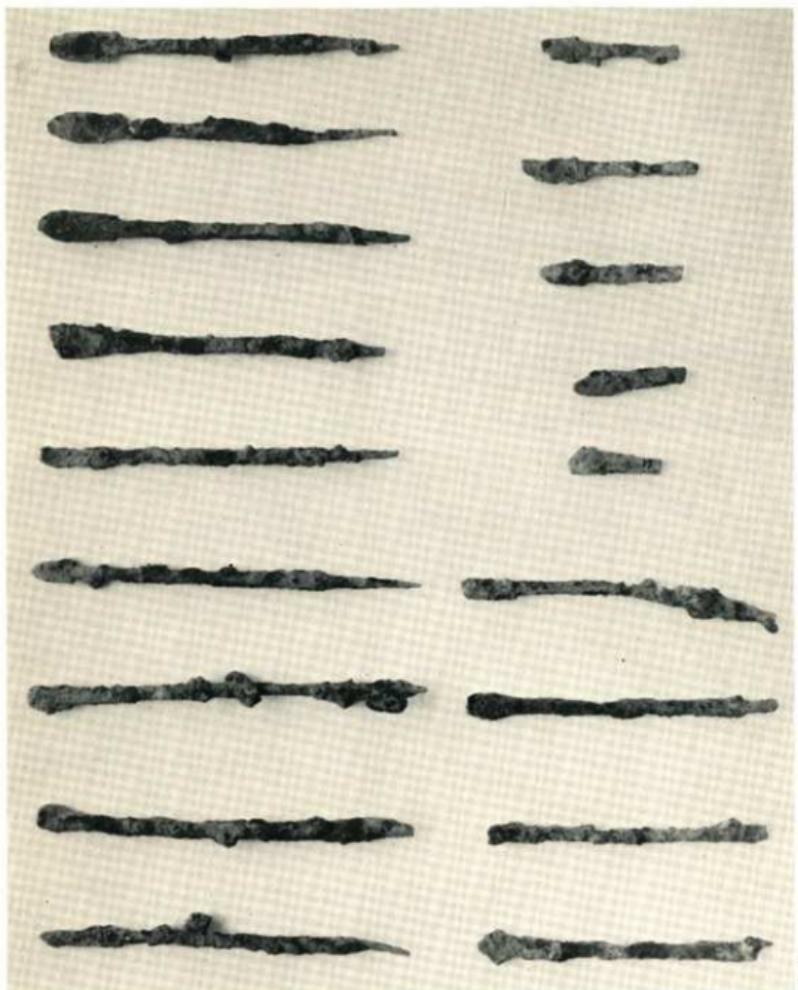


(2) 銀刀、刀子



(3) 土師器

図版第7 下清水第1号墳の調査



鉄器

図版第8 C地点およびD地点の調査



(1) C地点（北から）

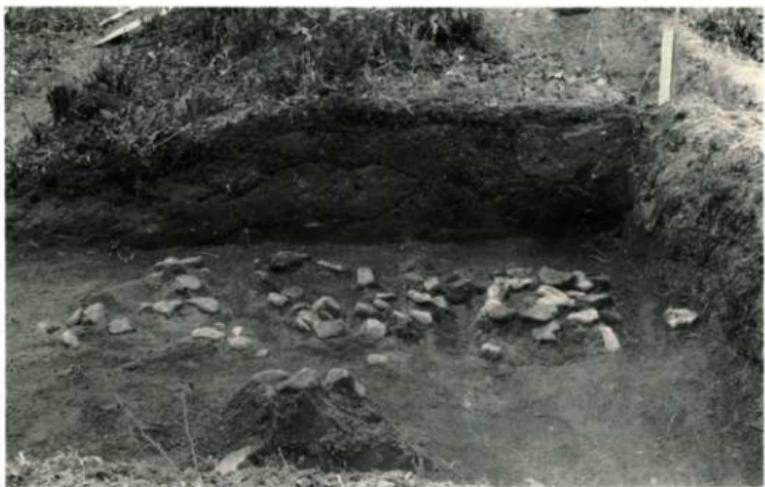


(2) D地点（北から）

図版第9 E地点特殊造構の調査



(1) 墳丘（西から）

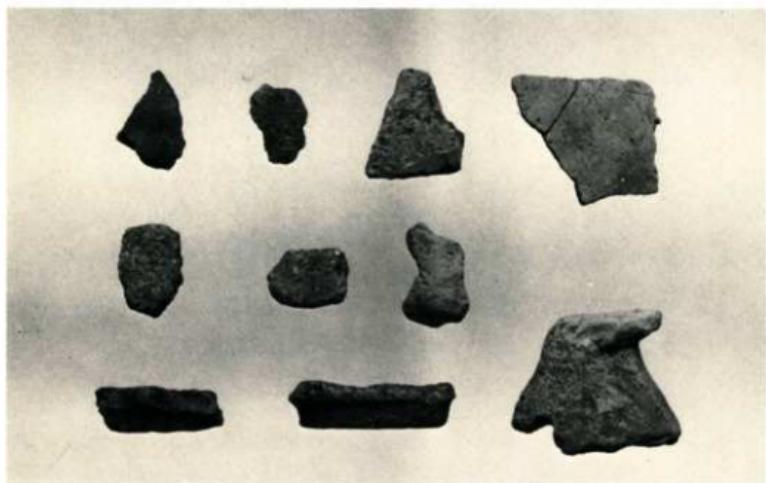


(2) 東西トレンチ西部北壁断面および配樋造構（南から）

図版第10 E地点特殊遺構の調査



(1) 浅いピット状遺構（南から）



(2) 出土した土師器

図版第11 下清水第2号墳の調査



(1) 墳丘（南から）



(2) トレンチ（北から）

図版第12 下清水第2号墳の調査



(1) 東西トレンチ東部北壁断面（南から）



(2) 墓窓器出土状態（北から）

図版第13 下清水第2号墳の調査



(1) 埋葬塚（南から）



(2) 出土した須恵器

昭和49年9月30日

水垂二ツ池古墳群
(非売品)

編集・発行 掛川市教育委員会
掛川市掛川1144-1

印 刷 中部印刷株式会社
浜名郡可美村東若林161

